■地域づくりの方向性―アドバイザーからの提言

今田は、篠山市の他の地域とは一線を画している。気候風土も違う。播磨に近いとよく形容されてきたが、地味の痩せた水不足の土地柄の中で、立杭焼に代表される半陶半農の生活文化を築き、清水寺や和田寺山の勢力圏を巧みに利用しながら、生き抜いてきた。江戸時代からは新田開発に明け暮れ、小さなため池をいくつも作りながら必死に土地を開墾し、今日の集落環境を築いてきたが、それでも十分とは言えず、灘郷への丹波杜氏の多さに結び付いている。

今回のワークショップでも意見の大半は、自治会内の活動関連では無く、今田地域全体を意識した外向け（都市向け）の意見であり、他地域の協議会とは明らかに異なっている。旧町全域を一つの校区とする今田は、中学卒業まで一つの学校に通う形となり、今田独自の連帯感と郷土意識を作りあげている。旧町が整備した公的施設は、県施設と共に今田の顔として校区として引き継ぐ形になり、地域の顔事態を潜在的資源から発掘しようとする校区のまちづくり協議会が多い中、すでに誰もがイメージ出来る核的施設を有し、立杭焼や陶芸関連施設は、全国にも名の知れた施設を校区として有している強みがある。この点も篠山市の他の校区とは大きく異なる。こうした独自の風土の結果が今回のワークショップの結果にも結びついているように思う。

今田を共和国として建国しようとする今回の提案は、篠山市からの独立を意図したものではない。ともすれば、立杭や陶芸美術館、薬師温泉等を中心に活動展開されそうな雰囲気を建国によって「今田は一つ」であり、今田地域全体を活性化する組織であることを明確に提示することを意図したものである。同時に住民だけでなく、これまで培ってきた立杭焼や薬師温泉のリピーター的ファンと一緒に地域づくりを展開しようとするものであり、行政圏域にとらわれることなく三田 NT や清水寺も含め、今田特有の生活圏に立脚した活動展開を図るためにも、建国によって会員として参加しやすいまちづくり協議会の形態として、提示するものである。同時に建国宣言することによってまちづくり協議会への啓発理解と住民への関心を広げ、従来の活動とは異なるより新鮮かつ有効な実践計画づくりを目指す事も意図している。

今回の今田「黒石・四斗谷共和国」（仮称）の建国は、「今田はひとつ」であり、地域住民だけでなく、立杭焼や薬師温泉等の多くの今田フアンと共に地域づくりを展開しようとするものである。

〇地域づくり（改修）のテーマ・目標の設定

●今田「黒石・四斗谷共和国」

今田はひとつ、立杭焼や薬師温泉のファンと共に創る今田の地域づくりを目指して

集う市民とともに作る５つの地域づくり

実現するためにすべきこと（基本方針）

●5 つの提言⇒５つの行動指針（案）

①校区のシンボルである施設をみんなで活用する⇒校区のシンボル施設は、みんなの資産、みんなで活用しよう

②半農の風土を新たな今田の魅力として情報発信⇒半陶の陰に隠れていた地域の魅力を新たな発想でコーディネートし、情報発信を展開する

③地域全体を散策出来る環境づくり⇒陶芸美術館で行われたまち歩き「窯元巡り」の成果を地域全体に広げ、集落や地域の活性化に結びつけよう（知られざる新たな資源の発掘と既成施設に変わる新鮮な魅力の底辺の拡張推進）

④清水・三田の縁を活かす⇒行政圏域の枠を超えた地域づくりの展開
⑤国と地域の連携体制の構築⇒校区として備えるべき資源と活動組織、地域や集落として備えるべき資源や活動組織、その役割分担と連携のもとに活動を展開、その活動自体がニュースソースとなる

① 農の国づくり

・地域の自慢の一つは、お米の美味しさである。そうした自慢の食材を来訪者があじわうことができるかどうかが問われる。おいしいお米やご飯をもっとアピールしよう。誰もが食し味わえるようにする必要がある。そのためには何が必要だろうか。
・今田へは車で訪れる。ゆっくりレストランで食せない人も多い。今後まち歩きのように地域散策等が出来る環境づくりを目指すのであれば、それらと対応したお米やご飯を食す環境づくりが必要ではないか。その辺を新たな特産づくりを踏まえて具体に検討して欲しい。篠山の特産開発は、黒豆に関連付けるものがあまりにも多い。ただし訪れた人達は、篠山の野菜やお米もおいしいと口をそろえる。田舎の漬物や味噌、こんにゃくも魅力だ。収穫体験なども重視してよい。黒豆入りにこだわる必要はない。皆さんが食している普段の家庭料理等を提供できる環境が理想だ。毎日家で黒豆入りコーヒーやコロッケを食している人は少ないはず。地元の食材で、家庭料理を提供する環境づくりをイベント的にしかけたらどうか。歩くイベントであれば「おむすび」等が面白いのではないか。気軽に今田の味を体感させる環境づくりが、休耕田等の問題の解決づくりにつながらないか。今田には人は訪れている、その人たちをうまく取り込む仕掛けづくりがポイントである。

② 自然の国づくり

・まず、アピールしたいのは新緑と紅葉だろう。ただし今田の紅葉は、丹波地域の紅葉の名所のように古刹に付随しない。全山 360 度の紅葉である。植林地の少ない半陶半農の生業がもたらした景観ともいえる。ただし古刹のような知名度はなく、嵐山のような名所でもないが、見れば明らかに勝っている。これを PR しない手立てはないだろう。この新緑と紅葉の美しさをどう体感させ、伝えるか、がポイントである。案内看板は立杭焼や秋の枝豆や食材でもよいが、その付加価値を高め、ひそかに新緑と紅葉の隠れたブームを今田から起こしたいものである。その資質は十分。後は戦略である。
・これに夏のサギソウを加えたい。小学生が頑張っている。高齢者の協力も得やすい。これまでの取組成果を活かして、地域としてどう協力し、夏の今田の風物詩とするか。立杭焼のビヤホールと共に夏のサギソウもひとひねりして、普及啓発に努めたいところだ。

③ 若者の国づくり

・楽空間とともに今田の強みである中学まで全員同窓生の環境を活かそう。連帯意識は強い。高校大学と離れ離れになるが、中学生までの縁を活用して、今田出身者が閲覧し、参加できるツールづくりを検討されたい。若者定住はすぐにできるものではないが、校区のまちづくり協議会として、郷土に関心を持っていただいている若者に対して、意見交換や情報共有するシステムとツールを提供し続けていくことが、肝要ではないか。建国する今田だからこそ、国民への呼びかけはしやすいはずである。この建国機会を活かして、IT 等を活用し集い、交換し、情報共有できる環境とツールを開拓しよう。

④　翁の国づくり

・高齢者は年齢と共に活動圏域は狭まる。校区でどう高齢者が参加しやすく集える場づくりを行っていくかが課題だ。校区で一つで良いのか。4 つの地域に一か所づつあるべきなのか、全体の集う場の配備やネットワークの体制づくりを同時に進めながら、高齢者の経験が生かせ、やる気や生きがいが持てるような参加の場づくりが必要だろう。

・そうした集いの場に若者や子供達をどう参加させるか、定例化した集いの中でのインパクト行事として年間計画の中で、意図的に位置づけるべきである。

⑤　連の国づくり

・連は、コミュニティである。人と人との心をいかに通わせるかがポイントだ。まちづくり協議会としての取り組みや催し物は、常にこのコミュニティを意識したものといえるが、建国後意識すべきは、まちづくり協議会の取り組みや活動の情報共有に特に配慮されたい。国民である住民に共和国の取り組みを伝達すること。同時に国民の声を役員や組織に反映するシステムをどう構築し、共有し、活用するかにかかっている。

・その中でワークショップで提案された「オカリナのまちづくり」と高齢化対策や通学、観光誘致も意図した公的な日常交通と救助体系をどう構築するかが課題となる。

・オカリナのまちづくりは、サークル的な有志による部会を設立し、独自の検討提案の基にまちづくり協議会で諮問決議する形で、活動推進と定着を図っていくことが基本となろう。国家斉唱はオカリナも面白いかもしれない。やる気がある人達で企画し、実践するかどうかは、協議会で決議するシステムが望ましい。

・新しい公的な足については、検討会を結成したい。関心ある人達で、勉強会から始める。他地域等ではどんな取り組みをやっているのか、そのあたりを調べ、研修会を行うスタイルで、当面取り組んではどうだろうか。

●最後に

国造りが横軸であれば、5 つの提言指針は、縦軸である。アドバイザーとしての懸念は、ワークショップではあまりにも外向けの活動提言が相次いだこと。そうした取り組みと共に内発型の集落や自治会と連携する地域おこしの視点が必要ではないか。既存組織の活用や連携、あるいは統廃合は、こうした地域おこしの視点から検討する必要がある。特に五つの提言の③と⑤の取り組みに十分配慮されたい。また④は情報発信の構築がカギ、独自の圏域でどう情報伝達と共有体制を築くか、ここに建国本来の意識付けと国民や会員登録の工夫が求められる。また情報発信については、TV やラジオ番組等のマスコミを活用する提案が、若者から寄せられている。この点についても工夫し、ダメ元でチャレンジすることが肝要である。

なお、国づくりはすべて部会としなくてよい。協議をして、取り組む必要性がある部会を設立していく。できれば既存組織をあてはめるのではなく、テーマ型の組織として、まちづくり協議会役員で諮問し、検討する流動的なテーマ型組織として運用すべきといえる。建国は、大変ユニークであり、他のまちづくり協議会にもインパクトを与える。それだけにやりがいもある。ぜひ成功させて欲しい。大きな成果があることを願ってやまない。

（アドバイザー　兵庫丹波の森協会・丹波の森研究所　横山宜致